

また一五四八年リスボンを出帆し、インドに渡ったのち、一五五五年まではゴア、マラッカを根拠として南方、中国などにおいて、主として貿易商人として活躍し、かなりの富を獲得した。

三十歳（一五五五年）になるや翻然として、全私財を投じ、イエズス会に入信し、医療および布教活動に献身的生涯を日本に於いて送った。

筆者は彼の没後四百年に当り、彼が滞在したマラッカ、およびゴアを訪ね、とくに当時、規模と内容において高度の診療内容を誇ったゴアの王立病院について診療実績を考証し、彼の豊後府内における医療技術のレベルについて推察し、併せて当時乱世に病める日本人に対する彼の医療および布教方法について、若干の私見を得たので報告する。

（開業医）

## 藤野巖九郎の蘭学の系譜

泉 彪之助

魯迅の小説「藤野先生」の主人公で、仙台医学専門学校の解剖学教師であった藤野巖九郎は、その祖父および父が蘭学を学んだことが従来から知られている。ここでは、演者が志している、医史学的観点を含めた魯迅研究の一環として、そのことについて総括的に記載し、その意義について考えてみたい。

### (1) 出身地について

従来、藤野巖九郎の出生地は、福井県坂井郡本荘村下番と記載されてきたが、巖九郎出生時（明治七年）の行政区劃に従って、敦賀県坂井郡下番村（または、敦賀県第十四大区七小区一組）と訂正したい。下番は、興福寺および春日神社の庄園、河口庄の一部で、河口庄は、本庄・新庄など十郷から成り、本庄は、中番、上番、下番に分れていた。番とは、庄園領主に対して夫役をとめる地域単位であつ

た。福井県の置県は、殿九郎出生後七年目の明治十四年であり、福井県令第十九号によって、下番村、中番村など十箇村が統合され、本荘村が成立したのは、明治二十二年であった。但し、適塾姓名録に「前越坂井郡本城 藤野升八郎」とある点、本荘が慣用的な地名として用いられた可能性もあり得ると考える。

(2) 殿九郎の家系と祖父勤所

殿九郎の先祖は、江戸時代初期に下番に移住し、代々医業に携ったと伝えられている。

現在判明している最初の人は、藤友仙（藤野恒宅家系譜によれば幽篋）であるが、その三代後の勤所（通称 岩二郎。また敬所、尚斎、正斎などの別名がある）が、初めて蘭学を学んだ。

勤所は、宇田川玄真に師事し、また玄真のもとで坪井信道とも親交を結んだ。後に勤所の子、升八郎が適塾に学ぶが、その因縁は、一つはこの勤所と坪井信道との交友に由来するものであろう。

勤所は京都で開業して高名を博していたが、病気になるて帰郷し、死去した。

(3) 父 升八郎

殿九郎の父、升八郎は、小石元瑞の下で二年間蘭学を学んだ後、弘化三年適塾に入門した。藤野恒宅家系譜では、升八郎の号は、春風、子山または容闇となっているが、実際は容庵であつたらしい。またこの家系譜では昇八郎となつており、適塾姓名録の升八郎と異っていて、いずれが正確かは明らかでない。升八郎の弟、良吉は華岡青洲に学んだ橋本長綱（左内の父）に師事したが、生涯独身であつたため、その跡を殿九郎が継いだ。（藤野恒宅家系譜は、右のように良吉の家を殿九郎が継いだとしているが、最近の坪田忠兵衛氏の研究によれば、殿九郎は幼時母方の大石家へ養子入籍しており、相互の関係は明らかでない。演者は一つの可能性として、この養子入籍は、現在でいう越境入学のためではないかと考えているが、今後の検討に待ちたい。）

升八郎は、時勢に動かされ、江戸へ出て砲術を学ぼうとしたが、戸塚静海に説諭されて断念した。これも勤所と蘭学者たちとの交流を基礎にして考えると、理解されよう。

また、升八郎は、適塾出身の蘭学者、大野洋学館の伊藤慎蔵とも交友関係にあつた。

福井への種痘の輸入に際しても、升八郎は積極的にこれ  
をとり上げたと伝えられる。

(4) 藤野 戡九郎における蘭学の影響

以上のような蘭学の伝統は、戡九郎にどのような影響を  
与えたであろうか。

第一に、戡九郎が解剖学を専攻した理由の一つに、この  
蘭学の影響を想像したい。解体新書に始まる蘭学に、解剖  
学が大きな比重を持っていたことと共に、「医範提綱」の  
著者である宇田川玄真の塾に、祖父勤所が学んだことが、  
戡九郎に影響を及ぼさなかったであろうか。

第二に、戡九郎が蘭学の伝統を色濃く持っていたため  
に、オランダ医学からドイツ医学への切替えに適応し切れ  
ず、後半生の比較的不遇な生活につながった感がある。こ  
のことについては、戡九郎が、医学教育における過渡期と  
いうべき時代に教育を受け、また個人的事情による学歴の  
制限という点の比重が大きい、次回に考察することとし  
たい。

魯迅は「呐喊自序」の中で、医学を志した動機として、  
父の病氣と、明治維新が西洋医学の導入に導かれたことと

を上げているが、偶然にもその蘭学の伝統を受けついで教  
師によって、生涯続く大きな影響を受けたのであった。

(福井県立短期大学 第一看護学科)